ボランティアOSAKA

めざしたい
生涯現役
地域と共に

第30号

2002
AUTUMN

●発行●
(福)大阪府社会福祉協議会
大阪府ボランティア・市民活動センター

特集 ボランティアで彩る
セカンドステージ

●市町村ボラ連 Vサイン No.19

特集

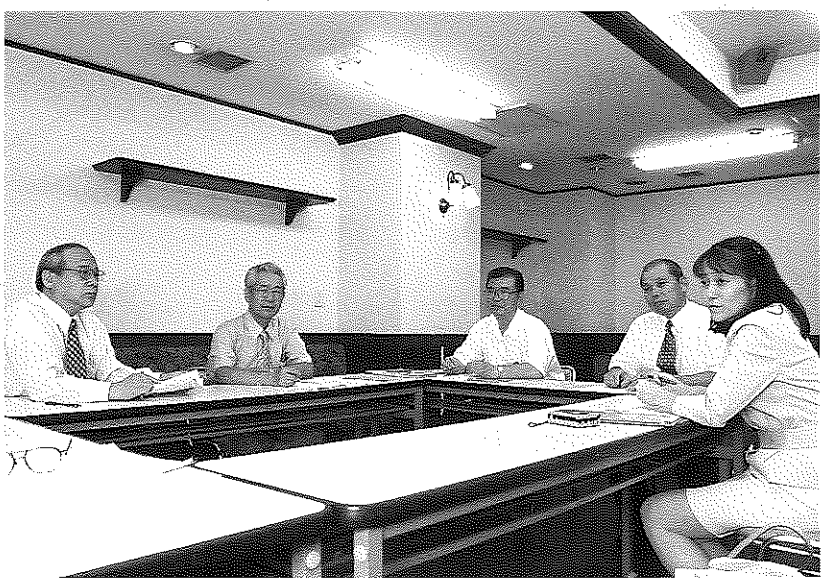
めざしたい　生涯現役　地域と共に
ボランティアで彩るセカンドステージ

「めざしたい　生涯現役　地域と共に」。これは大阪府高齢者保健福祉月間の標語です。このスローガンのもと、9月の一か月間、大阪府ではさまざまなイベントで高齢者の生きがいづくり、社会参加の取り組みを進めてきました。

全国でも内閣府、厚生労働省、全社協など9団体が、9月15日～21日の『老人の日・老人週間』のキャンペーンに取り組みましたが、その中においても「高齢者の知識や能力をいかした、就労・社会参加・ボランティア活動を進めよう」という文言が"キャンペーンがめざす5つの目標"のなかの一つに謳われました。

このように、高齢化が進むわが国ではいま、シニアの社会参加、ボランティア活動が、大きな期待をもって注目されています。言うまでもなく、シニアの豊富な人生経験、人脈、ビジネススキルは社会的な財産。それが地域社会で活かされたなら、私たちの社会はもっと住みやすいものになるはずです。

そこで今回は、積極的な社会参加で多彩な地域活動、ボランティア活動に取り組んでいる方々を紹介しながら、「ボランティアで謳歌する『生涯現役』」をテーマとした座談会を開催しました。



【座談会出席者】

シルバーアドバイザー養成講座13期生	町田　孝　さん
シルバーアドバイザー養成講座13期生	北野　忠男さん
シルバーアドバイザー養成講座　講師	瀬川　一人さん
大阪府地域福祉推進財団　大阪府立老人総合センター	新谷　佳子さん
司会　大阪府ボランティア・市民活動センター　所長	森　　茂輝

座談会 ボランティアで謳歌する「生涯現役」

地域福祉活動の担い手を育成する「シルバーアドバイザー養成講座」

森　本日はお忙しいなかありがとうございます。さて、標記のテーマの特集を企画した時点でまず思ったのが、このテーマで座談会を開くなら、大阪府の「シルバーアドバイザー（以降ＳＡと略）養成講座」に触れないわけにはいかないな、ということでした。そこで本日は、この講座を修了されたお二人のＳＡの方にもご参加いただきましたが、まずこの講座の概略を、担当しておられる新谷さんからご説明していただけますか。

新谷　「シルバーアドバイザー養成講座」は大阪府の独自事業で、昭和63年度にスタートしました。サラリーマンＯＢなどのシニア層を対象に、さまざまな地域福祉活動の推進者、ボランティアを育成することを目的としたもので、当時の岸知事が名付け親なんです。運営を私ども大阪府地域福祉推進財団が担当しており、毎年、約１６０名の受講者に1年間の講座を受けていただき、現在では講座修了者は２０００名を越えるに至っています。

　当初はボランティアという言葉もまだまだ一般的ではなかったので「地域福祉活動の推進者」という言い方をしており、受講者も大正生まれの方が多かったようです。しかし現在では大半が昭和生まれの方々で、平均年齢も毎年、約一歳ずつ若くなっています。

新谷　住子さん

森　瀬川先生はスタート当初から講師をお務めですが、昔と今とではだいぶ様子も違ってきているのでしょうか。

瀬川　現在では「地域のボランティアリーダーの育成」と目的もはっきりさせているので、昔とはかなり雰囲気も違いますね。大きな違いは、いまの修了者の皆さんは、まず地域で積極的に仲間づくりをされる。昔はせっかく修了されても「一人で活動する」という人が多かった。「言い出しべえになって地域の人を巻き込んで」という人は少なかったと思いますよ。

　コースとしては、私が講師を担当している「地域活動コーディネーター」の他に「福祉ボランティア」、「国際交流活動」「世代間交流活動」の４つの専攻がありますが、修了者の皆さんは、それぞれの地域で実に活発に活動しておられますね。

森　なるほど。さて、町田さんと北野さんは共にＳＡの13期生でいらっしゃるわけですが、現在はそれぞれ、どのような活動をしておられるんでしょうか。

町田　私の場合は、大きく分けて二つあります。一つは、手づくりおもちゃでの世代間交流。牛乳パックやストローなどをリサイクル利用して、竹とんぼや風車などを作りながら子どもたちと交流しています。大阪市平野区にある全興寺（ぜんこうじ）の境内で、川口住職のご理解もあって毎月「あそび縁日」を開いて

町田　孝　さん

「あいほうぷ」での陶芸

いますが、子どもたちが昔ながらの手づくりおもちゃに、目を輝かせて夢中になってくれるのがうれしいですね。

そしてもう一つは陶芸ボランティアです。SA講座に先立ち老人大学で学んだ陶芸を活用して、吹田市立障害者支援交流センター「あいほうぷ吹田」で通所者の方々と一緒に楽しんでいます。やはり皆さん、「創作すること」を楽しみ、感動される。そんな喜びを共有できるのが、また私たちの励みにもなるのです。

北野　私の場合は、母の在宅介護の経験やホームヘルパーの資格を生かして、高齢者のいろんなお世話をしています。痴呆症のお年寄りのお世話を含めて、「大阪市介護家族の会」や「住吉区要介護者を抱える家族の会」（すみれの会）での活動が中心です。他に、ヒーリングガーディナー（大阪府が組織している公園ボランティア）として、浜寺公園などで障害者や高齢者を方々を、案内したり説明したり…とガイドヘルパーのような活動をしています。

ボランティアで実現する「生涯現役」

森　それぞれの分野でご活躍されていますが、そもそもの活動のきっかけは何だったんでしょう。

町田　やはりSA養成講座の受講が大きなきっかけですが、ではなぜSAかというと、サラリーマン時代の自分を変えてみたかったんですね。そこそこの企業でそれなりのポジションにいたのですが、やはりサラリーマン時代は企業の歯車でしかなかった。おまけにできないことも多く、新幹線や飛行機のキップも部下に買ってもらうので、自分では買えなかった。

しかし定年退職すれば、そうはいきません。いろんなことを自分でしなければならない。そこで実は、自己改革のためにオーディションを受けて役者になったんです。役者になれば、いろんな役をこなさなければなりません。NHKの朝の連ドラにも出させていただきましたが、これでもそこそこ売れているんですよ（笑）。

それはともかく、老人大学での陶芸は、これは自分の「趣味の世界」のものでした。しかし、それだけではどこかモノ足りなかったんですね。もっと仲間を作って、社会に役立つこともしたかった。そこでSAの「世代間交流」の専攻に進んだというわけです。

北野　私も38年間、ある企業に勤務し、平成11年に退職したサラリーマンですが、現役時代はプロジェクトチームじゃないけれど、いつも「社会が必要としている一歩先の仕事をしている」という自負がありました。ですから退職後も「生涯現役であり続けたい」と思っていたんです。「余生を悠々自適に」などとはまったく考えていなかった。

しかし「生涯現役サラリーマン」というわけにはいきませんから、「何をもって生涯現役か？」と自問自答の日々が続きましたが、在宅介護をしていた母が施設に入所し余暇が確保できるようになったとき、たまたま広報で「SA養成講座受講者募集」の記事を見つけました。「自分の住む町で母の介護経験やヘルパーの資格を生かしてボランティアをしたい」という気持ちで「地域活動コーディネーター」専攻を受講し、そこで瀬川先生の講義に大いに触発されたということです（笑）。

つまりは「ボランティアをすることで生涯現役であり続けたい」という思いがSA養成講座の受講動機ですが、修了後は、地域でいくつかのボランティア団体の立ち上げにも関わりました。お陰さまで、現在は7～8団体の役職に就かせていただき「生涯現役」を謳歌しています。そしてSAの先輩諸氏の活躍を拝見し、ボランティア活動を通じて「80歳を越えても現役でいける」と確信しています。

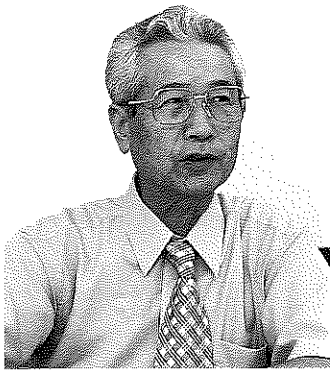
北野　忠男さん

お出かけ支援活動（海遊館にて）

すみれの会の「おでかけ交流会」（長居公園）

一人（ひとり）・一趣味（いち）・一貢献（いち）

瀬川　お二人のように、「仲間をつくり、ボランティアで生涯現役であり続けたい」と思っている人は、実はたくさんいるわけです。しかし、SA養成講座を含めて、そうした「きっかけづくり


瀬川　一人さん

の場」についての情報が、まだまだ多くのシニアに届いていないんですね。先日も、近所にお住まいで最近定年退職された方が「定年後は何をすればいいですかね」と相談にこられたんですが、地域にはいろんなボランティアサークルがあるのに、その情報が退職サラリーマンに届いていない。

それはともかく、SA養成講座は1年間のボランティア実践スクールと言っていいと思うんですが、内容も幅広く、基礎から実践までの多彩なプログラムが用意されている。そして修了者は、自分も地域で何かの活動に取り組みながら、地域のボランティアリーダーとしての役割を発揮する。何かを体験していなければリーダーシップを発揮できないわけですが、しかし私は、多くのシニアの方々に、いつもこう申し上げているんです。

それは「一人・一趣味・一貢献」。町田さんの陶芸のように、趣味がこうじてボランティアになる。それでいいと思うんです。いきなり地域のボランティアリーダーになれと言われても難しいわけですから、まずは小さなことから始めればいい。

先日も寝屋川市の方と話していたんですが、寝屋川では、シニアのボランティアサークルが100以上集まってネットワークを作っている。そこには趣味のサークルも含まれていますが、それでいいんです。

シニアの多彩な趣味や、豊富な仕事経験、人脈が地域社会で活かされたなら、私たちの社会はもっともっと住みやすいものになるはずですから。

「あいほうぷ」の障害者の皆さんともちつきで交流するSAの皆さん

小学生と伝承玩具作りで交流（SA養成講座）

ボランティアとは、「自分の世界を広げ、やりがいを実感する」ための投資

新谷　昔はシニアのボランティアというと、どこか「社会への恩返し」とか「それが名誉なことだから」というニュアンスがあったように思います。しかし現在のシニアの方々は、「自分の生き方」としてボランティアを考えておられるように思います。そして瀬川先生は、10年以上も前からそういう生き方を社会に提案してこられました。その意味では、わが国のシニアボランティアのパイオニアでいらっしゃいますよね。

瀬川　ボランティアとは名誉職ではないわけで、まさに「自分の生き方」なんですね。これからはますます元気な高齢者が増えるわけですが、多くのシニアが自分の生きがいづくりのためにも、多彩なボランティア活動に携わっていただきたいですね。

森　そうですね。では最後にSAのお二人から、読者の皆さんへのメッセージをいただけますでしょうか。

北野　瀬川先生が言われるように、まず「小さなことから」、そして「出来ることから」でいいと思います。そして「自分が心を開く」こと。心を開けば仲間もできる。そして自分の世界が大きく広がります。私の場合、ボランティアとは、その「自分の世界を広げ、やりがいを実感する」ための投資だと思っているんです。

町田　先に述べた全興寺（せんこうじ）の川口住職がユニークな方で、「あそび縁日」について「おもろうて、いい加減に、いつ止めてもいい」という姿勢で…とおっしゃるんです。ボランティアについて言い得て妙だと思うんですが、なにも難しく考えなくていいんです。楽しく取り組めばいい。

そして会社と違って、「水平の仲間づくり」ができるのがボランティアの楽しさです。しかしベースは「人にやさしく」。この基本があれば「おもろうて、いい加減に、いつ止めてもいい」という姿勢で始められます。

森　なるほどね。そろそろ時間もなくなりましたが、本日はお忙しいなか、多くの貴重なご意見をありがとうございました。

森　茂輝

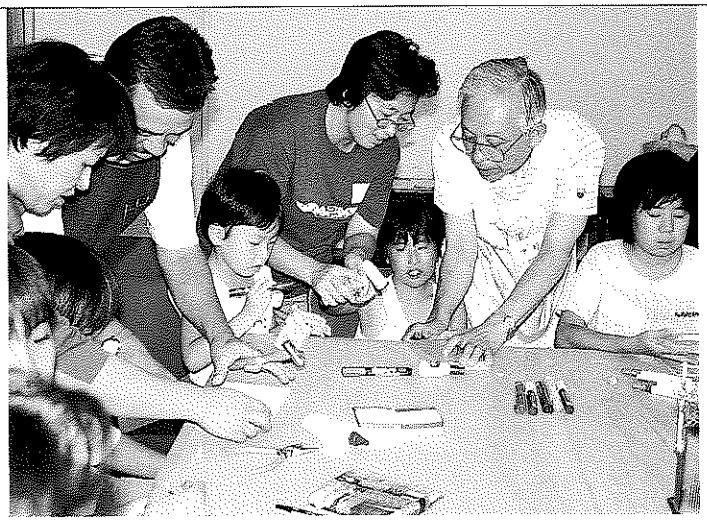
趣味を活かした日曜大工ボランティアで、地域社会と交流

箕面市「うっでぃいず」

社協の講習会をきっかけにグループを結成

箕面市社会福祉協議会では、平成11年より「日曜大工ボランティア講習会」を毎年開催していますが、「うっでぃいず」は、その第一期修了生の皆さんを中心に結成された日曜大工のボランティアグループです。現在、メンバーは14人。高齢者が使う踏み台や薬箱、幼稚園の遊具や小学校のプランターなど、リクエストに応えて、さまざまな木工製品を作っています。

会長の浦中斉（ただし）さん（71歳）は若い頃からいろんな現場仕事をしてきた経験もあって、日曜大工の大ベテラン。玄人なみに「コンクリ練り」などもする腕前の持ち主です。「社協の講習会を受けた仲間と話し合って、3年前にグループを結成しました」と語ります。



「ゆうやけの会」の子どもたちに手作りおもちゃを教える“うっでぃいず”のメンバー

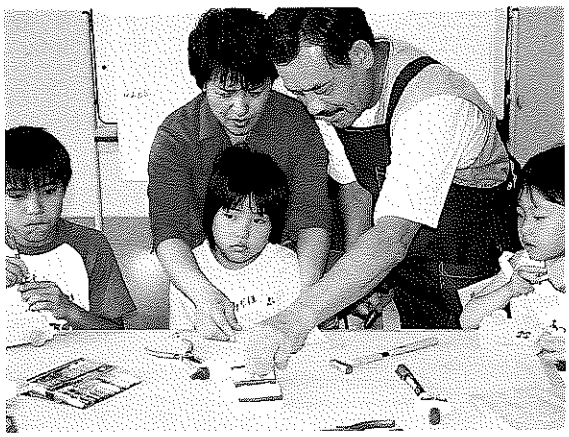
左から中野清二さん、井上叡さん、首藤睦子さん、浦中斉さん、鈴木典永さん

その立ち上げのときからの仲間が、写真の井上叡（さとし）さん（65歳）、中野清二さん（62歳）、そして首藤睦子さん（53歳）、鈴木典永（のりえ）さん（43歳）たち。みんな日曜大工が大好きで「物づくりが楽しめて、かつ人に喜んでもらえるのが何よりも嬉しい！」と口を揃えます。

井上さんも中野さんも浦中さんと同じ退職サラリーマンですが、「現役時代は仕事ばかりで地域社会とはほとんど無縁の生活」だったとか。

「サラリーマン時代、在住する箕面市は寝に帰るだけ。けれど市の広報紙で社協の講習会を知り、”うっでぃいず“の立ち上げに参加しました。そして活動を始めてからは、地域のいろんな人たちとの交流も生れ、地元への愛着も芽生えました。また素敵な仲間との出会いも、この会で活動することの大きな魅力です」と井上さん。また「浦中会長をはじめ、メンバーの皆さんは全員が個性的で前向きな方ばかり。かつユーモアにあふれている。そんな素敵な仲間との交流が楽しい」と中野さん。そして、そんな二人の発言に女性陣もうなづきます。

首藤さんは7年前、吹田市から箕面市に移ってきましたが、大工仕事が好きで、吹田では『女性のための大工講座』を受講したこともあるとか。また吹田市のリサイクルプラザ（くるくるプラザ）では指導員をしていたこともあります。一方、シニアというにはまだお若い鈴木さんは「陶芸などを含めて、とにかく物づくりが好き。そんな私ですから”うっでぃいず“の活動はぴったりです」と語ります。



原材料は、能勢の森林組合から買い受けた間伐材。それがメンバーの手によって素敵な木工製品に変身していきます

地域の人たちと交流できるのがうれしい

さて取材の日、偶然にも子どもたちを対象にした「木工教室」が開かれるとあって、その会場（障害者福祉センター）に同行させていただきました。「ゆうやけの会」という、箕面市の公立小学校に通う障害児とその兄弟・姉妹の会の催しで、”うっでぃいず“のメンバーは早速、おもちゃ作りを指導していきます。なかには釘を打つのは初めてという子もいて、そんな子どもたちにメンバーは一つひとつの作業を丁寧に教えていきます。

次第に出来上がっていく手作りおもちゃに、子どもたちも大はしゃぎ。「私たちにとっては孫のような世代の子どもたちですが、彼らの笑顔に、逆に私たちが励まされるんですよ」と〝うっでぃいず〟のメンバー。また、ときには子どもたちからお礼の手紙が届くこともあり、「そんなときが、この活動をしていて本当によかったな…と思う瞬間です」とも。

「こうしたボランティア活動で、会社人間だったころにはほとんど付き合いのなかった地域の皆さんと交流でき、ものの考え方もずいぶん変わりました。今は、仕事があること、人から求められていることのありがたさをしみじみ実感しています」と浦中会長。

メンバーには、技術の高い人から大工仕事は初めてという人までさまざまですが、みんな和気あいあい、楽しみながら活動しているのが〝うっでぃいず〟。箕面の町にすっかり定着した、素敵なボランティアグループです。

子どもたちと一緒にプランターづくり

シニアならではの人生経験と感性で、一瞬のシャッターチャンスを狙う

NPO法人「広報写真ボランティア」

5年前の「なみはや国体」を機に結成

以前にも本誌で紹介させていただいたNPO法人「広報写真ボランティア」。結成のきっかけは5年前の「なみはや国体」で、大会事務局が募った写真撮影を担当する市民ボランティアのうち、「今後も活動を続けたい」という有志が集まってグループは結成されました。以降、行政の催しなどで広報写真の撮影を担当しながら、99年10月にはNPO法人格を取得。いまではメンバーの数も増え、行政の催し以外にもボランティア団体の行事、その他さまざまな写真撮影のリクエストに応えて活動を続けています。

理事でもある渡辺松夫さんは70代ですが、サラリーマン時代は企業の経理・総務畑を歩いてきました。退職後のやりがいを探すうち、要約筆記ボランティアの講習を受講。それがきっかけで地元の社会福祉協議会に出入りするようになり、そこで「広報写真ボランティア」のことを知り参加することになったとか。

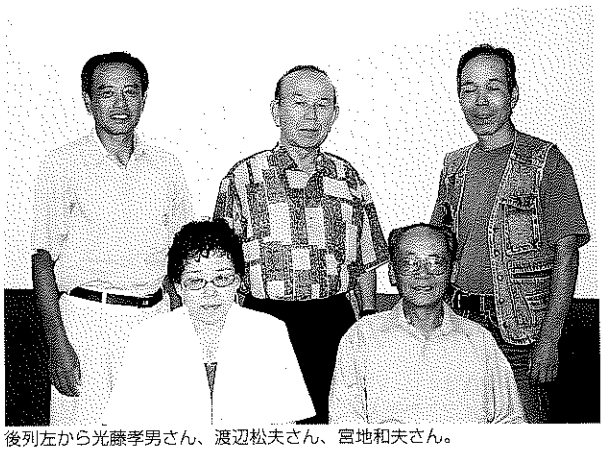
同じく70代の口野長治さんは、5年前の「なみはや国体」での写真ボランティアの経験者。観光バスの運転手を長らく勤めてきましたが、仕事柄、バスの乗客に記念写真の撮影を頼まれることも多く、「自然と腕前も上がってきたのかな」と笑って語ります。

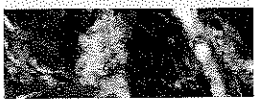
光藤孝男さんも、口野さん同様「なみはや」経験者。まだ50代ですが、会社の早期退職制度を利用して長年勤務してきたメーカーを退職。今年になってからこの会に合流しました。

そして女性の川村満佐子さんは、会には現役時代から所属。会社は一昨年12月に退職しましたが、「職場に、この会のメンバーがいたのが入会のきっかけ」とか。

人生経験を積んだシニアにこそふさわしい活動

さて、4人揃って企業人OB（OG）ですが、「自分の好きなことで人の役に


後列左から光藤孝男さん、渡辺松夫さん、宮地和夫さん。
前列同、川村満佐子さん、口野長治さん



立てるのがうれしい」と口を揃えます。とくに「障害者団体のイベントなどで、いい表情のシャッターチャンスをモノにしたときなど、出来上がった写真を見て本当に喜んでくださるんです。それが励みになり、今度はそれ以上の写真を撮るぞ！とファイトも沸いてくる」とのこと。

写真のキャリアはそれぞれですが、みんな「写真が好き」で、「人が好き」で、「喜んでもらうのがうれしい」という気持ちは同じです。「それがチームワークにつながり、また次の依頼にもつながっていくんです」と会のたち上げから参加している副理事長の宮地和夫さん。

ボランティアとは言え、写真は一発勝負。交通費程度の報酬しかなくても、撮影現場に立てば真剣勝負です。行政関係の大きなイベントなどでは、プロのカメラマンと同じように報道席から撮影しますが、「負けるものか！という対抗心が沸きますね」と皆さん。「でも現実には、プロのカメラマンと同じ瞬間にシャッターを切ったときには安心したりして…」と川村さん。20代からキャノンをいじってきたというキャリアの持ち主でも、そんな気持ちになるそうです。

「ボランティアだから…という甘えは禁物。お引き受けした以上は、やはりいいものを撮る。それに、行政の広報写真は多くの人の目に触れます。それがやりがいでもあり、緊張を強いられることでもありますね」。撮影したフィルムは現場で依頼者側に渡してしまうことが多く、「家族からは『本当に写真を撮ってきたの』と疑われることもありますが、印刷されたものを見せて『これは俺が撮ったんや』と言うときは溜飲がさがりますね」とは男性陣の一致した意見。

さまざまな現場で、さまざまな被写体を撮影するだけに「気配りやマナーも求められます。その意味では、豊富な人生経験を積んだ私たちシニアにふさわしい活動と言えるかも知れませんね」とメンバーたち。シニアならではの人生経験と感性を作品に反映させる、ユニークかつ素敵なボランティア活動です。

福祉関連イベントでのメンバーの作品

「地元に貢献したい」が活動の支えです

「司馬遼太郎記念館ボランティアの会」副委員長　名渕和功（なぶちかずのり）さん

現役時代は大手家電メーカーのサラリーマン

「竜馬がゆく」「坂の上の雲」などの作品で知られる作家・司馬遼太郎。

昨年の11月にオープンした東大阪市の司馬遼太郎記念館は、「街道をゆく」などの自筆原稿や自筆書画、取材ノートや書簡などに加え、約2万冊の蔵書が収納されている記念館です。安藤忠雄氏が設計した建物は、自宅と庭伝いに一体化され、庭では生前のままに保存された司馬遼太郎の書斎を窓越しに見ることができ、また150余席のホールでは映像を上映したり、ときに講演会や読書会が開催されます。運営には司馬遼太郎記念財団があたっていますが、同時に約280人の「ボランティアの会」のメンバーが記念館の運営を支えています。

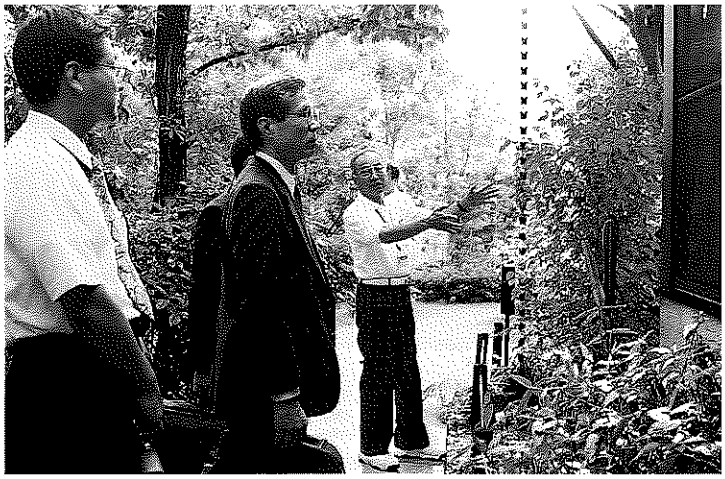
名渕和功さん（68歳）は、その会の副委員長。現役時代は大手家電メーカーに勤務するサラリーマンで、退職後は東大阪市の老人大学「遊友塾」に入学。さらに4年ほど前には東大阪市文化財ボランティアとしても登録するなど、さまざまな地域活動に取り組んできた経験があり

来訪者に説明する名渕さん

ます。

そんな名渕さんですから、司馬遼太郎記念館が市民ボランティアを募っていると知って迷わず参画。いまでは代表の天野高夫さん（56歳）らと一緒に、ボランティア会の運営にリーターシップを発揮しています。

「と言っても、私たちは学芸員ではないから正式な解説をするわけではありません。簡単な説明はしますが、主な仕事は見学者の誘導や庭掃除、『友の会通信』の制作などですが、みんな"地元に貢献したい"という気持ちでやっている。それに、日常を離れて本の世界、文学の世界に浸れるのが魅力です」と語ります。



遠来の来館者から礼状が届くことも

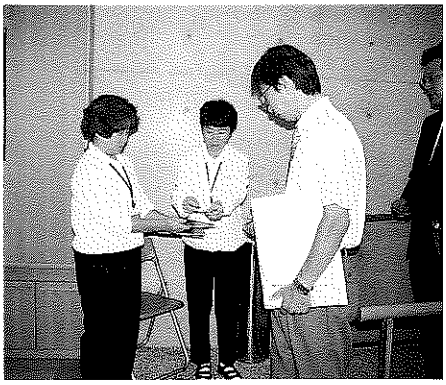
自身「東大阪に住んで約40年になる」というだけに、地元への愛着もひとしお。「記念館のあるあたりは閑静な住宅地で、サラリーマン時代は、この前の道をよく通っていました。司馬先生の本はすべて読破…というわけではありませんが、やはり地元の誇りです。最近では週のうち4日はここに出ているでしょうか」。

ボランティアの会の会員は、毎日20人近くが午前と午後に分かれて活動していますが、「約280人いても、活動への温度差や、意欲はあってもその日は都合が悪い…という人もいるので、キャスティングには苦労します。しかし、遠来の来館者から礼状をいただいたり、帰りがけに『ありがとう』と声をかけていただいたりすると、苦労もふっ飛びます。最近も、遠来の見学者から『35度以上の暑い中にもかかわらず、玄関で私たちを迎えてくださり、帰りがけには"お気をつけて"とやさしく声をかけていただいた気配りに感動しました』という礼状をいただきました。そんなお手紙をいただくと、やはり嬉しいものですね」と名渕さん。

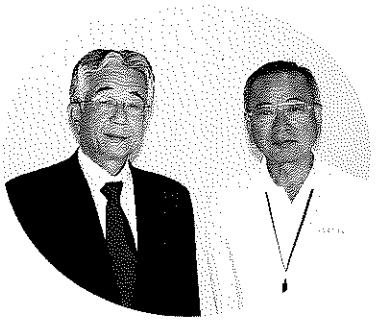
この記念館は、全国から年代を問わず老若男女が訪れるのが特徴とのことで、それだけにいろんな気配りも必要。「ですから、どちらかというと若い人より、対人関係の経験豊富な年配の方が向いている。ボランティアの皆さんには本当にお世話になっているんですよ」と財団の増田恒男・学芸部長。実際、会員の半数以上は現役をリタイアした人たちで、その年輪パワーが記念館を支えていると言っていいかもしれません。

シニアが支える、ユニークな「文化ボランティア」です。

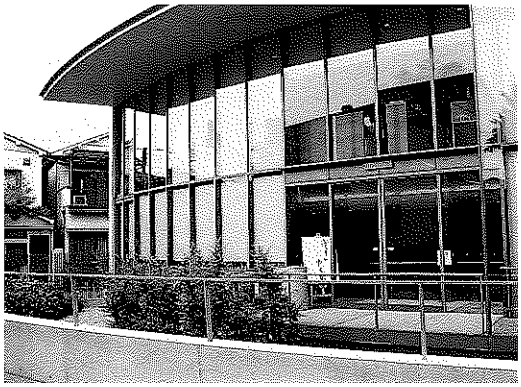
約2万冊の蔵書が収納されている「司馬遼太郎記念館」

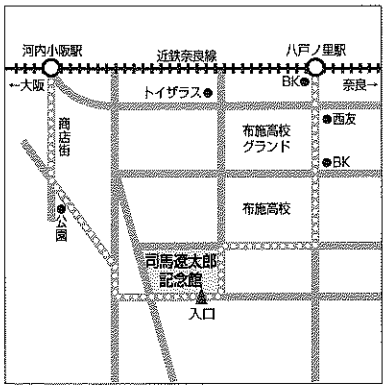


入場券のモギリもボランティアが担当



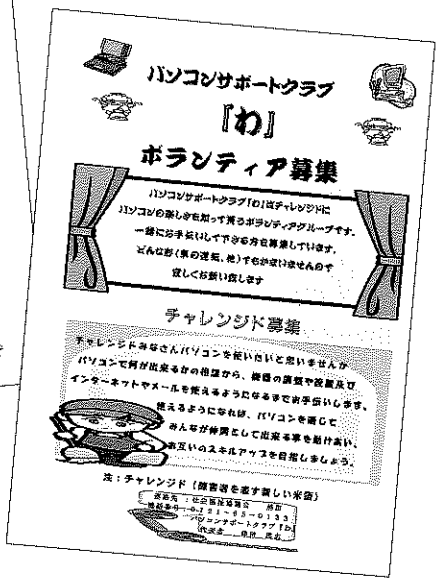
代表の天野高夫さん（左）と名渕和功さん





難病と付き合いながら パソコンでボランティア

「パソコンサポートクラブ『わ』」代表　津田展志（のぶゆき）さん



結婚して8カ月めに発病

大学の電子工学科を卒業し、医療機器メーカーのセールスエンジニアとして順調にサラリーマン生活を送っていた津田展志（のぶゆき）さん（54歳）が、ギランバレー症候群という難病にかかったのは27歳のときでした。ある有名な女優さんもかかっていたというこの病気の症状は、脊髄に蛋白が増え、全身がしびれて触覚が麻痺し、ひどくなると呼吸まで止まるというものです。

「結婚して8カ月目のこと、腕がしびれてきたので病院に行ったんです。でも病名も原因もわからない。他のいくつかの病院でも診察してもらいましたが、ひどくなるばかりです。やっとある病院の神経内科で病名がわかり、すぐに入院。いらい、私とこの病気との長い付き合いが始まりました」。

この難病に襲われた彼は、10カ月の入院とその後の2年ほどのリハビリを余儀なくされます。その後はこう着状態を保ってきたものの、しかし25年以上経った今なお後遺症で全身がしびれ、額（ひたい）を除いて全身の皮膚感覚がありません。

「触覚がないので、立っていても座っていても、足の感覚がないのでとても不安です。パソコンのキーボードも、目で見て触っていることを確認するしかない。当初は外出などとてもできませんでした」。

しかし、慣れるにつれて外出もできるようになり、やがていくつかの仕事に就き、40代の約10年間は家族の協力もあって制御盤設計の会社に勤めてきました。しかしその会社も3年前にリストラで退職。現在は自宅で再就職活動をしながら、20年のキャリアを活かして「パソコンサポートのボランティア活動」に取り組んでいます。

地域の人たちとの出会いがきっかけ

「パソコンで再就職先を探しながら、エッセイや童話を作るようになったんです。そんなあるとき、私の投稿が掲載された本が送られてきました。そしてそこには、こんな投稿文も掲載されていたんです」。

それは『障害者にとってパソコンがあれば、どんなに世界が広がるだろうか。しかし障害者にパソコンを教えてくれる人や施設はほとんどありません』という内容のものだったといいます。

そんなとき、同じ町に住む男性から『ヘルパーをしている妻が、中途から視覚障害になられた方にパソコンのことを聞かれたので、障害者のパソコン感について聞かせてほしい』という旨の連絡がありました。

やりとりをするうち、津田さんはその男性と意気投合。さらに社会福祉協議会のボランティアとしてIT講習会などをしていた大学院生とも知り合いになり、彼らは地元の河内長野市で「パソコンサポートクラブ『わ』」を結成することになります。

知り合った二人は共に健常者ですが、「こうした皆さんがおられて初めてボランティアグループをたち上げることができました。一人では何もできませんが、とりあえず平日も空いているということで私が代表者になりました」と津田さん。

「パソコンサポートクラブ『わ』」の会員募集チラシの一文を紹介しましょう。

『チャレンジドの皆さん、パソコンを使いたいと思いませんか。パソコンで何ができるかの相談から、機器の調整や設置、およびインターネットやメールを使えるようになるまでお手伝いします。使えるようになれば、パソコンを通じてみんなが仲間として、できることを助け合い、お互いのスキルアップを目指しましょう』。

ちなみにチャレンジドとは、障害者を指す新しい米語で、「神から、挑戦という使命や課題、あるいはチャンスを与えられた人々」という意味が込められています。

障害者になって初めて、人の優しさや、いたわりの心が分かったような気がします

「地元の社会福祉協議会にも妻の介護で登録に行きましたが、重度の障害者の方が参加している作業所の人たちとも知り合いになれ、活動はいま、徐々に軌道に乗りつつあります。会員には口でパソコンを操作する人、足の指だけで操作する人もいます。会員数（現在13名）はまだまだ少ないものの、協力してくださるボランティアをさらに募り、多くのチャレンジドにパソコンの楽しさと便利さを体験してほしい」と津田さんは熱っぽく語ります。

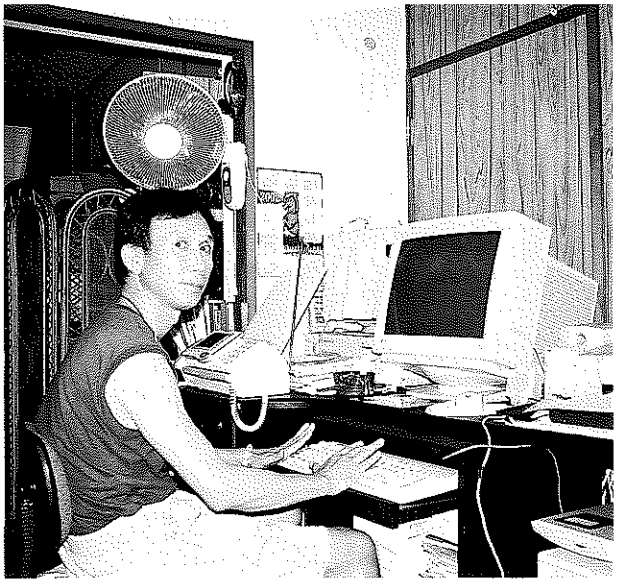
そして「障害者になって初めて、人の優しさや、いたわりの心が分かったような気がします」とも津田さん。

発病からしばらくは「生きる望みがなくなった」という失意の彼を、ときに叱りながら支えてきた妻、そしてお母さんや子どもたち。さらには、通勤途上で出会った「走り去るバスを追いかけてまで私を乗せようとしてくれた小学生」や、優しく声をかけてくれた老夫婦や若いOLたち…。

「みんな本当は優しい心を持っているんです。日本人は、それを素直に発揮する勇気にすこし欠けているだけなんです」。

そんな人たちと出会ったことが、彼の現在の「パソコンボランティア」につながっているのは想像に難くありません。穏やかに語る表情から、「障害に負けないぞ！」といったファイトと、生きることへの情熱がひしひしと伝わってきます。

津田さんの「50代からのボランティア事始め」。私たちが、彼から学ぶことはけっして少なくなさそうです。



情報コーナー

■平成14年度　共同募金運動 オープニングセレモニー

10月1日から12月31日まで、赤い羽根共同募金運動を「あなたのまちの幸せのために」をスローガンに実施。ご協力をお願いします。オープニングセレモニーでは大阪府知事、市長などが参加を呼びかける予定です。

日時　10月1日　午前8時30分～9時15分
場所　ＪＲ大阪駅御堂筋口（東口）付近（雨天決行）

■ＯＳＡＫＡ　ＮＰＯアワード2002

「"私"から始まる市民な活動」をテーマに、多様な分野の多様な活動を募集し、表彰します。

グランプリ30万円（1団体）、ベネッセウーマンサポーター賞15万円（1団体）、奨励賞10万円（6団体）、ホープ賞5万円（1団体）、継続活動賞5万円（1団体）

応募締切　10月18日（金）必着

第一次（書類審査）を通過された団体に、下記日程で第二次審査（プレゼンテーション）にのぞんでいただきます。

日時　11月30日（土）14時～18時30分
場所　大阪産業創造館イベントホール
問合せ　特定非営利法人　大阪ＮＰＯセンター
　　TEL　06(6460)0268
　　FAX　06(6460)0269
Ｅメール　osakanpo@onp.or.jp

■第21回「東大阪ふれあい広場」

東大阪市ボランティアセンターでは、高齢者、障害者と市民及びボランティアがふれあいや交流を図り、福祉の向上とボランティア活動への理解と協力を促進するため、「東大阪ふれあい広場」を開催します（入場無料）。

日時　10月20日(日) 午前10時～午後3時
場所　東大阪市立総合福祉センター
　　（近鉄奈良線永和駅下車北へ徒歩約2分）
内容　福祉展、作品展、バザー、模擬店、演芸コーナーなど
問合せ　東大阪市ボランティアセンター
　　TEL　06(6789)5550

■第4回「ボランティア基金チャリティーコンサート」

日時　12月5日（木）午後6時30～
場所　東大阪市立市民会館市民ホール
　　（近鉄奈良線永和駅下車東へ徒歩約1分）
出演者　木村　弓氏（映画「千と千尋の神隠し」主題歌、作曲・歌唱者）、
　　サウスユニオン（関西電力社員等で結成されているバンド）
協力券　一般　　前売2500円（当日3000円）
　　学生(高校生以下)　前売1500円（当日2000円）
問合せ　東大阪市ボランティアセンター
　　TEL　06(6789)5550

■「大人と子どもの地域あいさつ運動」

熊取町社会福祉協議会では、地域のコミュニティづくりの一環として「大人と子どもの地域あいさつ運動」を実施。小中学生の通学時間に通学路に立って、「おはようございます」と声をかけることで、地域の子どもと大人のつながりを深めていきたいと考えています。すでに1学期と2学期は始業日から約1週間ずつ実施しました。3学期は平成15年1月8日（火）～17日（金）を予定しています。

問合せ　熊取町社会福祉協議会
　　ＴＥＬ　0724(52)6001

北摂

平成14年度 サマーボランティアスクール レポート

7月29日午後1時、全10日間をかけて開催されるサマーボランティアスクールがスタート。豊能地域に在住在学の高校生から大学院生まで22人が集まりました。

「新しい自分のスタートライン～必ずみつかる！ あなたにできること～」というタイトルのスクールは、池田・箕面・豊能の3社協合同開催で、かつ、企画から運営まで学生ボランティアスタッフの手によってつくられています。「ボランティア」を知ってもらい、仲間づくりと新しい自分を発見してほしい、と、熱のこもった準備を進めてきました。

初日、ボランティアのいろはを学びました。「不安を持つということはがんばろうと思っているということ。だからボランティア活動に対する不安は大いに持っていいんだ」という講師のメッセージに皆の気持ちがほぐれていきました。2日目は「車椅子」と「コミュニケーション」について学び、その後は社会福祉施設でのボランティア体験と続きます。普段接しない子どもたちや高齢者の方、障害者の方と出会い、「ありがとう」の一言にこころがあったかくなったり、「なぜ施設職員さんは利用者と話をしないんだろう？」という素朴な疑問を抱いたり、将来の進路がより確かになったり、と様々な発見・感動がありました。

この期間を通して、初めは「ボランティアって何だろう？」といった一人ひとりから「ボランティア」は当たり前の行動と思えるようになればいいんじゃないか、もっと「ボランティア」を知ってもらわなければいけない、と積極的な意見が飛び交うようになりました。

「ボランティア」はすることのみ目的ではなく、それを通して広がる友情や「私は私として、あなたはあなたとして、お互いにとても大切」と心から実感できる喜びが湧きあがっていくことが大切なのかと思いました。

一人ひとりの実践はこれから始まります。

（箕面市社協　松並咲子）

河北

ボランティア活動は体力から リズム体操で楽しく河北交流会

河北ブロック交流会が7月18日（木）、四條畷市ボランティア連絡会主催で四條畷市立市民総合体育館（サン・アリーナ）に於いて開催されました。

第一部は河北ブロック6市の連絡会の役員と四條畷市の連絡会の役員との交流会が行われ、歓迎の挨拶の後、大阪府ボランティア・市民活動センターより府内のボランティア活動に関する現況報告があり、引き続き河北ブロック各市の代表者からボランティア活動の報告が行われました。ボランティアグループ数、規模、活動状況等は各市さまざまですが、ボランティア活動が積極的に実施されている力強い報告がありました。

第二部は体育館の広いコートに場所を移し、新たに四條畷市ボランティア連絡会の会員60人も加わり、90人近い参加者により「ボランティア活動は体力アップから！」と、リズム体操に挑戦です。講師にNPO法人「リズム体操研究会」の池田明子氏を招き、池田氏の指導のもとに行われました。

初めての人も多かったと思いますが、軽快なリズムと遊び心を取り入れたプログラムで楽しい一時を過ごしました。日頃の運動不足を痛感された参加者も多かったのではないでしょうか。

河北ブロックの交流会は二巡目に入っており、今までにない交流会ができれば…との思いで企画しましたが、暑いなか参加くださいました河北ブロックの連絡会の皆様、本当にありがとうございました。

（四条畷市ボランティア連絡会会長　新井晨介）

河南

家庭的なムードで 柏原市ボラ連 第3回ボランティア展

9月8日、久し振りに柏原市健康福祉センター「オアシス」を訪問しました。途中、オカダ通りで雨やどりをしたため畠山会長の開会の挨拶には遅れましたが、河野守道さんの講演には間に合いました。

河野さんは奈良市にお住まいですが、夫人が柏原市の小学校長などを務めておられることから、ご登場を願ったそうです。ご本人は奈良県トライアスロン協会やウルトラマラソン協会の会長さんでもありながら、退職後に取得された造園関係の資格を活かして国際協力事業団（JICA（ジャイカ））のシニアボランティアに応募し、昨年、南米ウルグアイで日本との修好80周年記念事業として作られた日本庭園の管理技術顧問、要するに荒れ果てた庭園の修復管理を4か月も務めて成果をあげられた体験談です。

過酷なランニングへの挑戦が自分のチャレンジ精神を生んだと思うこと、日本人のような規則正しい勤務、義務感ということとは無縁の、国としては富裕なウルグアイ人と協働するなかで、互いに理解しあえたことなどを伺い、それを受けた市長さんのご挨拶にも、柏原市の職員も国際的なボランティア活動の研修を続けているという解説がありました。

講演の後、朝から展開されている各グループの展示ブースを回りました。これまでとは違うという感じを受けたのは手芸活動の多様化です。以前よりも参加グループや種目が増えて、この勢いなら、施設などへのサービスも充実するのでは感じました。介護用品のコーナーで、車椅子の来場者の注文に合うように作品の補正をされている様子も印象的でした。ホールの舞台では手話劇や人形劇、大型紙芝居・大正琴などの発表が続けられ、多彩な福祉ボランティア活動が家庭的な雰囲気のなかで、華やかに演出されていました。

（広報部会河南ブロック担当　宮田信直）

泉州

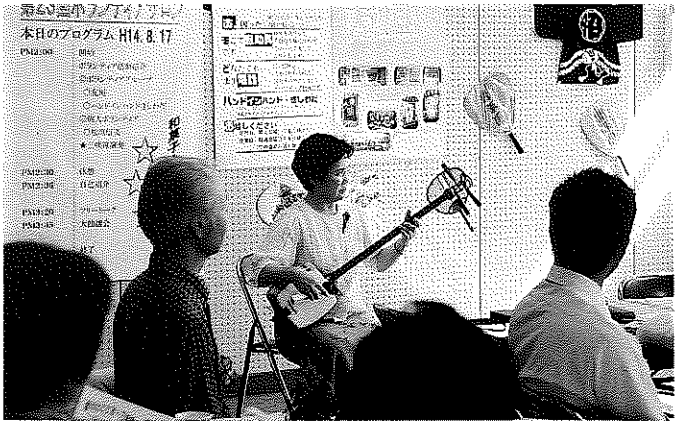
ボランティア活動の発展と充実を図って「ボランティアサロン」を開催

岸和田市ボランティアセンターでは、ボランティア相互の交流を深めるとともに、活動を広く市民に啓発することにより、ボランティア活動の発展と充実を図ることを目的に、『ボランティアサロン』を偶数月の第3土曜日に開催しています。

実行委員会を設け、企画、運営、司会進行など、すべてを担っています。この8月は、岸和田祭りの雰囲気で設営し会場を盛り上げ、ボランティアグループ・個人のボランティア活動紹介、休憩を挟んで（この間、ボランティアグループによるコーヒー、手作り和菓子の販売）個人の趣味を活かした三味線の演奏で和気藹々に。

残りの時間は、各テーブルで実行委員が中心となり、自己紹介やフリートークなどを行い、最後にお楽しみ大抽選会を行い、あっという間に、2時間が過ぎます。

以前は、ボランティアをしている側からのお話が多かったのですが、最近は、実際にボランティアを受けられた方や、いま切実にボランティアを求めている方々の生の声（情報）も聞くことができ、ボランティアを続けている人も、これからボランティアを始めようと考えての初参加の人も熱心に耳を傾けています。



平成10年に始まり23回開催してきて、たくさんの出会いがありました。これからもっと多くのボランティアに携わってもらえるような『サロン』にしていきたいです。

（『ボランティアサロン』実行委員長　西野孝子）

Hello! ボランティアセンター

守口市社会福祉協議会ボランティアセンター

守口市京阪本通2−13−1 さつきホールもりぐち内
TEL 06−6992−2715
FAX 06−6993−0134

登録ボランティア団体の連携が自慢

連絡会の北垣登美会長（左）とコーディネーターの内田直樹さん

地下鉄谷町線『守口』駅からすぐのところにあるのが守口市社会福祉協議会ボランティアセンター。他の社協ボランティアセンター同様、相談や活動紹介、交流会の開催、機材の貸出や会場提供などの事業を行っていますが、今春より独自事業として、21名の運転ボランティアを組織して移送サービス事業を行っています。これは自力で外出することが困難な要介護の高齢者や重度障害者の社会参加の促進とＱＯＬ（生活の質）の向上を目的としたもので、「親切で、便利で安心」と利用者から好評です。運転を担当するのは講習を受けた市民で、「講座では法令順守や交通マナーはもちろん、救急法もマスターしていただきます」とコーディネーターの内田直樹さん。それだけきちんとした講習を受けた方が運転ボランティアとして利用者のお世話にあたるわけですから、利用者の「便利で安心」という評価もうなづけるというものです。

さて、現在24のグループが登録ボランティア団体として活動していますが、その連絡会が年４回行われ、ボランティアフェスティバルなどの催しのときには一致団結、さまざまなアイデアを出し合って協力するのも守口の特長です。「中には高校生や大学生のグループもありますが、大きな催しのときには世代や属するグループを越えて協力しあいます。今年も７月の『海の日』にボランティアフェスティバルを開催。このときもバザー、模擬店、人形劇、車椅子体験など、それぞれの団体が特質を発揮したメニューでイベントを盛り上げてくださいました」とボランティア連絡会の北垣登美会長。フェスティバルも来年は10周年とのことですが「総力をあげて取り組みますよ」とも北垣さん。

８月に開かれたボランティア連絡会

取材の日は、たまたまボランティア連絡会が開かれていて、この日はかねてからの懸案であった機関紙の再刊も決まり、また一つ新しい動きが加わりました。

羽曳野市社会福祉協議会ボランティアセンター

羽曳野市誉田4−1−1 羽曳野市総合福祉センター内
TEL 0729−58−2315
FAX 0729−58−3853

コーディネートの一つひとつを大切に

羽曳野市役所に隣接する総合福祉センター。この新しい建物のなかに羽曳野市ボランティアセンターは入っています。「市役所のそばということで場所もわかりやすく、市民の皆さんが気軽に訪問してくださいます」とコーディネーターの居関則子さん。昨年４月、京都のある市町村社協から羽曳野社協に移ってこられました。

市民からの相談に対応する居関則子さん

「実は学生時代からボランティア活動をやってきて、卒業後は社協で、ぜひボランティアコーディネートの仕事がしたかったんです。しかし以前の職場ではそれはかなわず、羽曳野社協ならこの仕事ができるとあって、思い切ってここに移ってきました」と語ります。

そんな居関さんだけに、意欲満々。さまざまな独自プログラムの開発などにも積極的に取り組んでいます。

取材の日も、居関さんの企画による「小学生ボランティアスクール」が開かれており、子どもたちは初めての「要約筆記」と「日曜大工」に挑戦。みんな楽しそうに手を動かしていました。

「ひとくちにボランティアといっても、いろんな活動メニューがあることを知ってもらいたいですね。体験教室が、そのきっかけになれば」と居関さん。また「去年参加した子がまた今年も来てくれたり、お礼の手紙をくれたりするとうれしい」。そして何よりも「コーディネートさせていただく、一つひとつのケースを大切にしていきたい」と語ります。

現在、47団体が登録し活動していますが、ボランティアアドバイザーの数も35名と多く、アドバイザー制度の立ち上げも早かったとか。また羽曳野は全国初の社協直営「24時間型駅前保育園」でも有名ですが、そんな「行動する社協」のボランティアセンターだけに、今後の取り組みがますます注目されます。

「子ども木工教室」と「要約筆記教室」

ボランティア・市民活動保険のごあんない

取扱保険会社：三井住友海上火災保険株式会社

ボランティア活動中の事故に備えて
ボランティア保険

補償内容

ボランティアがボランティア活動中に、①偶然な事故によってケガをした場合の「傷害保険」、②第三者の身体や財物に損害を与えた場合の「賠償責任保険」、③ボランティア活動中に死亡し、「傷害保険」の給付対象にならない場合の「死亡見舞金」の3つの制度がセットされています。

補償金額

		Bプラン	Cプラン（天災担保）
損害部分	ボランティア本人のケガ	死亡・後遺障害 2157.5万円	死亡・後遺障害 1060万円
		入院（1日あたり）8,700円	入院（1日あたり）5,900円
		通院（1日あたり）5,600円	通院（1日あたり）3,800円
		手術保険金／入院保険金日額に手術の種類に応じた倍率を乗じた額	
	特定感染症	補償します	補償します
	天災	×	補償します
賠償部分	対人	対人、対物共通 最高 4億円	対人、対物共通 最高 4億円
	対物		
死亡見舞金	死亡 本人の死亡	死亡 30万円	死亡 30万円

掛金

ボランティア1名 年間（中途加入でも同じ）	
500円	700円

加入できる人や対象となる活動

・無償であること（交通費、食事代など除く）
・自助活動ではないこと
・活動のための会議や、往復途上も含む

保険有効期間

毎年4月1日から翌年3月31日まで
（中途加入の場合は受付日の翌日から）

各種イベント参加者の補償に
ボランティア・市民活動行事保険

補償内容

ボランティア団体や各種の市民団体が主催する行事の参加中に、①参加者が偶然な事故によってケガをした場合の「傷害保険」と②主催者または参加者が第三者の身体や財物に損害を与えた場合の「賠償責任保険」の2つの制度がセットされています。

補償金額

		Ⅰ型（宿泊なし）	Ⅱ型（宿泊あり）
損害部分	参加者本人のケガ	死亡	500万円
		後遺障害	15～500万円
		入院（1日あたり）	3,000円
		通院（1日あたり）	2,000円
		手術保険金／入院保険金日額に手術の種類に応じた倍率を乗じた額	
賠償部分	対人	1名あたり 最高1億円 1事故あたり 最高2億円	
	対物	1事故あたり 最高500万円	
死亡見舞金	死亡 本人の死亡		

掛金

	Ⅰ型	Ⅱ型			
A区分	30円	1泊2日	248円	4泊5日	328円
B区分	128円	2泊3日	256円	5泊6日	336円
C区分	251円	3泊4日	264円	6泊7日	344円

加入できる人や対象となる活動

ボランティア団体や市民団体が主催する行事
（スポーツ活動や自助活動も含む）

保険有効期間

行事期間中
（開催1週間前までに受付が必要）

各種NPO団体等の活動に
非営利・有償活動団体保険

補償内容

ボランティア保険の対象外で、有償活動を行う団体が活動中に、①スタッフが偶然な事故によってケガをした場合の「傷害保険」と②利用者などの身体や財物に損害を与えた場合の「賠償責任保険」がセットされています。

補償金額

		Aプラン	Bプラン
損害部分	参加者本人のケガ	死亡 202万円	死亡 500万円
		後遺障害 6～202万円	後遺障害 15～500万円
		入院（1日あたり） 3,000円	
		通院（1日あたり） 2,000円	
		手術保険金／入院保険金日額に手術の種類に応じた倍率を乗じた額	
賠償部分	対人	1名あたり 1億円 1事故あたり 2億円	
	対物	500万円	
死亡見舞金	死亡 本人の死亡		

掛金

Aプラン	Bプラン
4,900円	6,300円

加入できる人や対象となる活動

営利目的ではないが利用者から実費を越える報酬を得ている活動、団体

保険有効期間

毎年4月1日から翌年3月31日まで
（中途加入者は翌々月1日～）

移送サービス活動に
移送中事故傷害保険

補償内容

移送サービス事業の活動中に、車輌に搭乗中の加入者や利用者がケガをした場合、実施主体の責任の有無に関係なく補償します。

補償金額

		Ⅰ型（車輌特定）	Ⅱ型（車輌不特定）
損害部分	参加者本人のケガ	死亡 2,260万円	死亡 1,923万円
		後遺障害 79.8～2,660万円	後遺障害 57.7～1,923万円
		入院（1日あたり） 3,000円	
		通院（1日あたり） 2,000円	
		手術保険金／入院保険金日額に手術の種類に応じた倍率を乗じた額	
賠償部分	対人		
	対物		
死亡見舞金	死亡 本人の死亡		

掛金

Ⅰ型	Ⅱ型
2,000円（車定員1名あたり）	2,000円（記名利用者1名あたり）

加入できる人や対象となる活動

移送サービスを実施するサービス実施主体の運転者、同乗のスタッフがその利用者

保険有効期間

毎年4月1日から翌年3月31日まで
（中途加入者は翌々月1日～）

市町村の社会福祉協議会へ保険料とともにお申し込みください

三井住友海上火災保険株式会社

ホームページ www.ms-ins.com カスタマーセンター 0120-63-2277
携帯電話・PHSからはTEL.03-3615-3111 受付時間 平日9:15～20:00 土日祝日9:15～17:00

ボランティアおおさか 第30号
2002年 AUTUMN
発行／(福)大阪府社会福祉協議会 大阪府ボランティア・市民活動センター 〒542-0065 大阪市中央区中寺1丁目1-54 大阪社会福祉指導センター内 TEL 06(6762)9631 FAX 06(6762)9679

「アジア太平洋障害者の十年」最終年記念 大阪フォーラム

ふれあい交流ひろば

今年は「アジア太平洋障害者の十年」の最終年!この10月にはその総まとめがここ大阪で行われます。この「ふれあい交流ひろば」は、アジア各国から参加される障害者の方々と地域住民の皆さん、イベントを支えるボランティアの皆さんとの国際交流の場として開かれます。

当日は"秋祭り"の風情で様々な楽しいイベントが催されます。皆さんの参加をお待ちしております。

平成14年
10月20日(前夜祭)(日)17:00〜20:00
10月23日(後夜祭)(水)17:00〜19:00

会場: 国際障害者交流センター(ビッグ・アイ)前広場

ステージプログラム

10月20日(日)

17:00	オープニング 沖縄民謡	先間盛一民謡研究所
17:30	地元歓迎のあいさつ	
17:35	コーラス	赤とんぼ
17:55	歌	北原由紀ほか
18:10	手話コーラス(童謡)	ふれあいサークル手話隊
18:30	ゴスペル	Gospel CODE
19:00	よさこい踊り	地元地域の皆さん
20:00	閉会	

10月23日(水)

17:00	オープニング 銭太鼓	銭太鼓ふるさと会
17:20	ウィルチェアーダンス	まゆみ劇団
17:40	ギター生演奏	Hanna With 北野仁史
18:10	アフリカ民族音楽	ひきたま
18:30	フィナーレ	ひきたま&会場の皆さん
18:40	ボランティアの皆さんの感想	(会場より自由参加)
	閉会・感謝のごあいさつ	
19:00	閉会	

催し内容

- ●ボランティアによるストリートパフォーマンス
- ●たこやきなどの模擬店(屋台)
- ●地元さかいの紹介コーナー
  (堺の観光案内・地場産業の紹介・障害者作業所の授産製品の紹介・販売など)
- ●さかいのボランティア紹介コーナー　など

【同時開催】

- ●パネル展「アジア太平洋と日本・大阪の障害者の現在」
- ●障害者の芸術作品展

問い合わせ先

主　催: 国際障害者交流センター(ビッグ・アイ)
大阪府堺市茶山台1-8-1
TEL 072-290-0962　FAX 072-290-0972

「アジア太平洋障害者の十年」最終年記念
大阪フォーラム組織委員会 ボランティア部会
(社福)堺市社会福祉協議会 ボランティア情報センター
大阪府堺市南瓦町2-1堺市総合福祉会館内
TEL 072-232-5420(代)　FAX 072-221-7409